

初学者向けの 政治学入門教科書 をめぐる4つの問い

先行研究とともに考える

犬塚 元(法政大学)

日本政治学会 2025年度研究大会
分科会D2「政治学の教科書の現在」
2025年10月12日(日) 東京大学本郷キャンパス



初学者向けの政治学入門教科書 をめぐる4つの問い

- 1 きちんと学生を見ているか？
- 2 政治を学ぶことと、いまの政治学を学ぶことの違いに意識的か？
- 3 コピペしていないか？
- 4 偏っていないか？



1 (学生のレベルについて)

生身の学生ときちんと向かいあっているか？ 学生の理解や習熟度、初学者の知識や疑問をふまえているか？ 研究大学の学生、優秀な学生、研究者志望の学生しか視界に入っていないのではないか？ 学生が学ぶべきことより、教員が教えたいことを優先していないか？ 教育する側の「ひとりよがり」に陥っていないか？

- ◆『政治学入門』の出発点の1つは、「再分配とはなんですか」と入門演習において学生から問われた経験。知識も興味も学習意欲も乏しい、「意識が高い」わけではない学生を主たるターゲットとした
- ◆研究者を育てるための教科書ではないこと、初学者教育には反研究者的な契機(留保やニュアンスを切り捨てて単純化せざるをえない、新規性・独創性を重視すべきでない、研究からリニアに接続しない)が含まれること、政治学研究者の評価を意識しないこと、を常に意識した
- ◆初学者に興味をもってもらう工夫: 視覚教材(図表や絵画)や囲み記事(独立した短い文章)を多くする、演習問題・映画紹介を設ける、「です・ます」調を採用して平易な叙述とする、欧米語の原語は排除する、など。叙述においては、政治に関わる綺麗事(政治に関心をもたなければならない、選挙に行かなければならない等)をひとまず疑ってみる視点、お金を稼ぐための職業のひとつとして政治を考える俗っぽい視点を積極的に導入

3

(前提となる学生の実情について)

- ・竹島2005は、「受講者に合わせて授業の内容やレベルを設定することは、あらゆる教育のイロハである。…本来であれば、受講生の実態を知ることなしに、授業のレベルや到達目標はおろか、授業内容さえ定めることもおぼつかないはずだ。しかし一体どれだけの教員が、自分の向き合っている学生の学力や興味関心を把握しようと努めているだろうか」と指摘
- ・山田2015は、本務校(関西学院大学法学部)における初年次教育改革の背景をめぐって、「法学基礎演習」「政治学基礎演習」の教室において「学生の学力上の分散が大きい」と指摘
- ・武田2022-24は、学生は「学修能力において、二面性を越えて多面的ですらある。特に本学[大東文化大学]のような中堅規模の大学においては学生の能力の幅はこれほどかというほど広い。そして、そのような学生をひとまとまりに語ることはできない。つまり、すべての学生が主体的学びを学びたいなどと思っていないかもしれないという疑いを持つことも必要」という点をふまえて政治学教育について検討すべきと説き、「市販されている知識網羅型教材は必ずしも本学の学生のニーズに添えていない」とする。そのうえで、学生に自分のレベルを理解させること(「メタ認知」)の有効性を先行研究をふまえて指摘
 - ・Lusk 2016は、政治学入門教育において学生にメタ認知を獲得させる「メタ認知戦略」の有効性を、学生の成績にもとづいて実証している
- ・三竹2021は、「学生の多くが、規範論的思考、いわゆる「べき論」と因果関係を探る実証研究的な思考の区別がつかず、政治学について学ぶ際に「べき論」しかイメージできない傾向にあります」と指摘

4

(多様な学生を対象にした政治学教育の方法について)

- ・竹島2004は、政治学教育を「市民教育」と等値する議論に疑問を投げかけ、どのような学生を対象とするかに応じて、政治学教育を、(1a)一般学生を対象とする教養教育、(1b)法学部生を対象とする教養教育(「専門的に政治学を学ぶ前の下準備的な役割」の教育)、(2)専門教育、(3a)政治家・官僚養成のための職業教育、(3b)研究者養成のための職業教育、(3c)教員養成のための職業教育に分類し、そのうえで、こうした「学問教育」に「市民教育」としての機能をもたせるための方法を検討。◆『政治学入門』は、この竹島の分類に従えば、(1a)と(1b)の学生を主たるオーディエンスに設定している
- ・竹島は、このうち(1a)の対象学生について、「政治や政治学に対する予備知識があまりなく、そればかりが興味さえない、という前提で話を進めないと、話しについてこれない学生、またはついてこようともしない学生が出てくる」とし、「そうであるならば、講義内容も、抽象的なアメリカ政治学の受け売りはやはり回避すべきであり、政治学の体系的教授へのこだわりは、放棄せざるをえないだろう。…一般の学生には興味を持ってない高尚な講義をして、これ以上、政治学的無関心層を増やすのは、政治学担当者としてやはり回避しなければならない」とする

5

(『自分からの政治学』と『はじめて出会う政治学』について)

- ・石川1999は、勉強しない学生が増えたことによって政治学教育の前提が「崩壊」したとの現状認識をふまえ、現状を直視することから出発し、学生を主体として位置付けて、その無力感を取り除く必要性を説く。そして、そうした課題に対応した教科書として自編著『自分からの政治学』を位置付け、そこでは小状況から大状況へと至る回路をつなげようとしたとする
- ・大嶽秀夫は、『はじめて出会う政治学』をめぐる座談会(村松ほか1997)において、(入門書とは区別される)教科書は、たとえ初学者向けであっても、学生に興味をもってもらう「つかみ」よりも「学生に媚を売っている」、基本的な考え方を教える「グラマー」から構成されるべきと主張
- ・阿部・内田1999は、「大学の大衆化というのは、そういう新しい底辺層の大学がどんどん増えていることですから、そこではやはり従来の政治学のフレームでは、なかなか学生さんに入っていけないでしょうね。では、何か新しいフレームがあるかといわれるとちょっと困る。やはり学問というのはそう斬新にはならないですから」(阿部)としたうえで、有斐閣アルマシリーズのような学生のニーズを意識した新しい教科書をめぐって、「身近なところからというのが、必ずしも分かりやすいかどうかは、ちょっと難しい問題」(阿部)、「身近な所で問題提起するには、研究者の力量が必要」(内田)、「いまは、ちょっと作り方が安易」(阿部)、「残念ながら日本では政治学のテキストをお書きになる方が、必ずしも文章がうまいとはいえない」(阿部)と否定的に評する

7

- ・Brown *et al.* 2022は、学生の様々なニーズや学習スタイルに対応するユニバーサル・デザイン(UD)にもとづいたカリキュラム開発の有効性を説く先行研究をふまえたうえで、アダプティヴ・ラーニング(学生の能力や知識に応じて調整されるコンピュータを用いた学習環境、AL)が政治学入門コースにおいて有効であったことを、学生アンケートによって実証
- ・他方Moore 2011は、アメリカの大学で政治理論を教える教員を対象にしたアンケート(N=1086)にもとづいて、アメリカの大学の政治理論教育では、学習者の学習スタイル・知識・興味に応じて個別に調整する教育方法(Differentiated Instruction)はあまり導入されていないと報告

6

(政治とはなにか、権力とはなにかというテーマ)

- ◆『政治学入門』は、「政治とはなにか」「権力とはなにか」という政治学的問いを、難易度や抽象性をふまえて初学者には不向きなテーマとして割愛。本書のこの特徴には、これまで批判的コメントが寄せられた
- ・内田満は、阿部・内田1999において、政治学の現状をめぐり、「政治学とは何ぞや」「政治とは何ぞや」という議論がないままに、現実流されてきたという、その辺が基本問題」と主張
- ・越智2020は、「政治的なもの」を問うことと、政治学教科書の相性の悪さを指摘。「多様な政治現象に共通する「本質」や「内実」を理解すること自体、不可能であるにもかかわらず、政治的なものを語ってしまう政治学教科書は、正答のない問いを問い続けるという袋小路的なものにならざるをえない。したがって、逆にいえばこの袋小路を避けるためには、どこかの部分で「政治的なもの」の体系的な追求を放棄せざるをえない。その意味において政治学教科書が増産されるということは、政治に関するある種の諦念が増産されるということでもある」

8

(映像資料の活用)

- ・内藤・兵藤2000-15は、「日本の政治研究と政治学教育の領域において最も軽視されてきた視点の一つは、政治現象における「人間」的要素(古風な言葉を使えば「実存的」側面)をいかに分析し叙述するか、そしてこれをいかに教授するかである」との立場から、映画・映像作品を用いた政治学教育の実践例を報告し、政治学のテーマ別に多くの映像作品を紹介(村上2020にも映画紹介がある)
- ・Stump 2013は、アメリカにおける政治学入門科目では、ポピュラーカルチャー(映画・小説)の利用が一般的であると指摘し、ポピュラーカルチャーは、(1)比較の題材として、(2)議論の出発点 springboard として、(3)視点を内在化 embedding するためのツールとして、政治学教育で活用できると整理。そのうえで、こうした教育手法の課題として、(1)伝統的な教科書の利用を望む学生の懐疑的な態度や、(2)エンターテインメントと教育のバランスが崩れる可能性、の2点を挙げる
- ・Scola *et al.* 2021は、政治学入門コースで用いられている副読本(コンパニオンリーダーズ)に見られるジェンダーバイアスを指摘(また、Atchison 2017は、アメリカの政治学入門教科書における、ジェンダー主流化の未達成を明らかにしている)。◆映画や小説を副教材として用いる場合にも同様の視点が必要となろう

9

(高大接続)

- ・石田1995は、私立大学の法学部に設置された17の政治学系学科のカリキュラムの比較をふまえて、本務校(龍谷大学法学部政治学科)の課題を検討するなかで、「高校教育と大学教育をどうつなぐかの問題は従来からあったが、一般教育と専門教育の区分の廃止でよりいっそう、固有科目(専門教育)の担当者はその問題を深刻に考えなければならなくなっている」と指摘
- ・遠藤2008は、架空の座談会形式の文章において、学生の質の変化について、「「常識」の欠落は感じます。特に、世界史の知識、第二次世界大戦後の歴史に関する知識の欠落は大きいです」、「歴史に関する常識を身につけてもらうことということは、政治学を学んでいく上で不可欠です」、「入試科目として日本史や世界史を学んでいても、断片的な知識にとどまっているために、せつかくの知識や情報が知性としていかされていません」と指摘
- ・西村2017は、高大接続を無視できない教員養成系大学における政治学教育をめぐる、クリックのシティズンシップ教育論の批判的検討をふまえて、高校までに学ぶ制度をめぐる政治過程を現代史的背景をふまえながら教えるカリキュラムを提唱
- ・蓮實2023は、政治学の教科書は、内容においても学習方法においても、高校の「公民」教科書を受け継いでいないと指摘

11

2 (政治と政治学のズレ)

政治について学んで理解することと、政治学について学んで理解することのギャップに意識的か？ いまの政治学ではほとんど扱わないような政治の基礎知識に目配りしているか？ 政治学の新しい知見にこだわらず、政治を理解するために最初に学ぶべきことを軽んじていないか？

- ◆『政治学入門』は、高校までの世界史・日本史・政治経済などの学習内容をふまえて、それを復習して活用しながら政治学に接続する方針を採った。たとえば、社会主義・共産主義の基礎知識がないまま、あるいは、近代史の基礎知識がないままでは、福祉国家、左右の対立などの現代政治の側面は理解できないという前提から、『政治学入門』ではこれらの説明に相当紙幅を割いた
- ◆『政治学入門』では、もとより、歴史学・思想史学における歴史理解の転換や、「ジェンダー主流化」などの近年の動向はふまえた構成としたが、あくまでも新しい知見よりも基礎的な知識を重視した
- ・小野2002は、政治学の教科書に「新しい理論動向」(「新しい制度論」、「新しい社会運動」、集合行為問題と合理的選択理論)を組み込むべきと主張
- ・村上2016は、教科書等の記述をふまえて、政治学教育の目的を、「学問としての政治学」を教えることと、「政治のしくみ、現状、成果と問題点など」を教えることの2つに区分し、「2つの目的は重なるが、同一ではない」とする(村上は「政治について自分で考え議論する力」の育成を第3の目的とする)

10

3 (学説をめぐる知的誠実さ)

学説や理論をめぐる知識を孫引きで説明していないか？ 学説や理論をオリジナルをふまえてきちんと説明するのではなく、既存の教科書の説明の型をそのまま繰り返していないか？

- ◆『政治学入門』では、テキスト読解を主たる方法とする学史・思想史研究者として、学説や理論のオリジナルテキストに直接にあたることを重視。政治学の古典的テキストとされてきた作品を、各章冒頭の「キーテキスト」として紹介・解説し、それぞれの章やテーマへの導入とした。
- ◆また、オリジナルテキストに遡る手続きの結果として、これまでの教科書が見落としてきた面白い論点(リップマン『世論』における日本論、『ピープルズチョイス』に見られるジェンダー論など)も記載
- ・越智2000は、日本の政治学教育におけるリーディングズの不在を論じるなかで、古典講読中心主義と、教科書をもちいた学びを対比し、後者の特色として「同時代性、応用可能性、体系性」を指摘。◆越智のこの区分をふまえるならば、『政治学入門』は、教科書という枠のなかに、部分的に古典講読中心主義を復元した試みとも言うことができる
- ・上條2025は、ダウنزの空間競争モデルをめぐる日本の教科書の説明が原典と比して正確かどうか、を検討したうえで、いまやダウنزの主張そのものを伝えることにはそれほど意味がないため、引用の正確性よりも論理的一貫性(ないしは理論的価値)を重視した説明のほうが望ましいと判定

12

4 (政治学と政治的スタンスの多様性)

特定の前提や方法に依拠しすぎていないか？ 政治学の多様性、政治的立場の多様性に目配りがなされているか？ 自分の方法や立場を初学者に押しつけていないか？ 「左」の学生にも、「右」の学生にも受容される教科書になっているか？

◆『政治学入門』では、学史・思想史研究者として、現代に至るまでのさまざまな政治学の潮流を観察者の視点から俯瞰し、歴史的に相対化する視点を採用することを通じて、手法や立場の偏りをできるだけ回避する手法を採用(典型的には終章の記述)。終章では、方法・サブディシプリンの違いを理由とする政治学内部の対立を批判し、様々な方法・サブディシプリンの政治学へと橋渡し

◆『政治学入門』では、「政治学のどのサブディシプリンが入門や概論を担当できるか・担当すべきか・担当してよいか」という問いの立て方をせず(つまり、政治思想 vs ポリティカルサイエンスなどのように、ほかのサブディシプリンとの競合や対立の図式は採用せず)、自分たちのサブディシプリンの手法や強みを用いて、いかにバランスのとれた政治学入門教科書をつくれるか、と課題を設定

13

- ・ 武田2022-24は、日本学術会議政治学委員会政治学分野の参照基準検討委分科会の示した「参照基準」(2014年9月)に注目し、そのうち、「社会科学の一分野としての政治学は、他の分野に比して、内部に、対立する諸契機の緊張関係や、多様な視角の相克を抱え込んでいるという特徴を持つ」、「ある単一の視角によって、あるいは指標によって、対象とする現象をとらえることはできない」、「多極間の位置づけを測定することを通じて現象に多角的に迫るのが政治学的方法の特徴」という記述を重視
- ・ 対して、加藤2017は、「新しい理論動向」を組み込むべきとした小野2002の指摘をふまえたうえで、いまや特定の「メタ理論的基礎」に依拠して知識を再構成する段階になっており、合理的選択論という「メタ理論的基礎」に依拠する教科書が登場している、との現状認識を示したうえで、しかし、メタ理論的基礎に関する批判的検討が不足しているため、再構成が偏って恣意的になったり、政治学の自律性を脅かしてしまったりする可能性を指摘し、対応策として、「批判的実在論」をメタ理論的基礎として採用すべきと説く

14

(そのほか)

◆『政治学入門』は、リベラルデモクラシーを「越える」のではなく、まずは、きちんとリベラルデモクラシーを学ぼうというスタンス

- ・ 大嶽秀夫は、村松ほか1997において、政治学の教科書・教育に関して、「もうちょっと政治思想の人がしっかりしてくれて、政治哲学というものを現実の問題と関連づけてきちっとやってくれるようになれば」と指摘。◆『政治学入門』は、高山(2002)などとともに、政治思想研究者による応答の1つとして位置付けられる
- ・ 蓮實2015は、シティズンシップ教育としての政治学教育においてCan-Do評価法(学習者がなにができるかにもとづく能力ベースの評価法)を用いることを提唱。◆これは、『政治学入門』のような初学者向け教科書に適用できる指摘で、章のねらいや章末課題をCan-Doステイメント方式で表現してもよかった
- ・ Engstrom 2008は、アメリカ政治入門の授業において、比較政治学の知見を導入することが有効であることを実験的手法にもとづいて検証
- ・ Glover and Tagliarina 2011は、政治学入門教育において学生たちの凝り固まった先入見を解きほぐすため、「自動的思考」をめぐる心理学の知見を導入する有効性を指摘
- ・ Martin *et al.* 2012は、政治学入門コースの教育効果をめぐって、受講学生の知識・関心が増加しただけでなく、(イデオロギー的立場は変わらないものの)個別課題をめぐる政治態度にも若干の有意な変化が生じたことを、成績とアンケートにもとづいて検証
- ・ Towner 2016は、政治学入門コースのクラスサイズは、学生の成績に影響を与えないことを準実験的手法で検証。影響を与えたのは事前知識、知能、出欠
- ・ Glazier 2024が伝えるように、政治学教育・学習の専門ジャーナル*Journal of Political Science Education*はAPSAのジャーナルとして2005年に創設され、政治学教育について、ケーススタディ、実験、効果測定などの多様な手法で実証する論文を掲載

15

引用・言及文献

- 阿部富・内田満 (1999) 「対談 今日の大学における政治学教育 (上) (下)」『現代政治学小辞典新版』を編集して、『書斎の窓』486、14-23頁、487、42-50頁
- 石川捷治 (1999) 「政治学教育の始め：『時代転換期』に学生と共に何を考えていくのか」、『法政研究』66(2)、243-269頁
- 石田徹 (1995) 「私立大学法学部政治学科における政治学教育の現状-電谷大学との比較(資料)」、『龍谷法学』27、644-656頁
- 遠藤誠治 (2008) 「問われる政治学教育の意味と方法」、『成蹊法学』68/69号、35-48頁
- 越智敏夫 (2020) 「戦後政治学における教科書の偏在とリーディングズの不在」、『新潟国際情報大学国際学部紀要』5、81-88頁
- 小野耕二 (2002) 「政治学の教科書には何が必要か」、『UP』31(10)、14-24頁
- 加藤雅俊 (2017) 「新しい政治学(の教科書)には何が不足しているか：政治学におけるメタ理論的基礎の必要性」、『名古屋大学法政論集』269、75-102頁
- 上條諒貴 (2025) 「日本の政治学教育におけるいわゆるダウンス・モデルについて」、『北九州市立大学法政論集』52、177-207頁
- 高山裕二 (2022) 『憲法からよむ政治思想史』有斐閣
- 竹島博之 (2004) 「大学における政治学教育-「学問教育」と「市民教育」の狭間で」、『福岡教育大学紀要 第2分冊 社会科編』53、11-28頁
- 竹島博之 (2005) 「学生の政治意識と政治学教育-教員養成系大学・学部を事例に」、『福岡教育大学紀要 第2分冊 社会科編』54、39-56頁
- 武田知己 (2022-24) 「アクティブラーニングは政治学教育にどのように役立つか(1)(2)：大東文化大学法学部政治学科の事例(2016-2022)を通して」、『教職課程センター紀要』7、99-110頁、9、45-52頁
- 内藤俊彦・兵藤守男 (2000-15) 「政治と映像：映画を教材とする政治学教育(1)~(補)」、『法政理論』33(1)、43-78頁~47(3-4)、8-82頁
- 西村邦行 (2014) 「教員養成の中の政治学：シティズンシップ教育論を手掛かりに」、『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』64(2)、85-96頁
- 蓮見二郎 (2015) 「Can-doによる政治リテラシーの評価：シティズンシップ教育としての政治学教育へ向け」、『法政研究』82(2)、225-262頁
- 蓮見二郎 (2023) 「高等学校新科目「公共」教科書の政治学的分析：概念と探求課題」、『年報政治学』2023-II、82-105頁
- 三竹直哉 (2021) 「ジャッジを知る：シャザド・チャミンのポジティブ・インテリジェンス論の知見と経験を政治学教育に活かす試み」、『駒澤法学』20(4)、145-152頁
- 村上弘 (2016) 「政治学教育における目的、内容、方法」、『年報政治学』67、1-140頁
- 村上弘 (2020) 「職業としての政治学教育：民主主義」、『リベラル・アクティヴ・ラーニング』、『立命館法学』387/388、623-687頁
- 村松政夫・大嶽秀夫・長岡勝 (1997) (鼎談) 政治学教育の流れのなかで-政治学の教科書を読む(上) (下) 『はじめて出会う政治学』を中心として、『書斎の窓』468、2-13頁、469、4-14頁
- 山田真裕 (2015) 『法学部における初年次教育改革』、『関西学院大学高等教育研究』5、59-71頁
- Atchison, A. L. (2017). Where are the women? an analysis of gender mainstreaming in introductory political science textbooks. *Journal of Political Science Education*, 13(2), 185-199
- Brown, C. L., Grussendorf, J., Shea, M. D., & DeMas, C. J. (2022). Changing the paradigm? creating an adaptive course to improve student engagement and outcomes in introductory political science classes. *Journal of Political Science Education*, 18(3), 301-326
- Engstrom, R. N. (2008). Introductory American government in comparison: An experiment. *Journal of Political Science Education*, 4(4), 394-403
- Glazier, A. R. (2024). A Multi-Method Approach to the Future of the Scholarship of Teaching and Learning. *Journal of Political Science Education*, 20(4), 650-664
- Glover, R. W., & Tagliarina, D. (2011). Ditching the script: Moving beyond "automatic thinking" in introductory political science courses. *Journal of Political Science Education*, 7(4), 394-415
- Lusk, A. (2016). Metacognitive strategies in the introduction to political science classroom. *Journal of Political Science Education*, 12(2), 141-150
- Martin, P., Tankersley, H., & Ye, M. (2012). Are they living what they learn?: Assessing knowledge and attitude change in introductory politics courses. *Journal of Political Science Education*, 8(2), 201-223
- Moore, M. J. (2011). How (and what) political theorists teach: Results of a national survey. *Journal of Political Science Education*, 7(1), 95-128
- Scola, B., Bucci, L. C., & Baglione, L. (2021). "Pale, male, and stale"? an analysis of introductory readers in political science. *Journal of Political Science Education*, 17, 770-793
- Stump, J. L. (2013). Exploring politics and government with popular culture: Justifications, methods, potentials, and challenges in introductory political science courses. *Journal of Political Science Education*, 9(3), 292-307
- Towner, T. L. (2016). Class size and academic achievement in introductory political science courses. *Journal of Political Science Education*, 12(4), 420-436

16